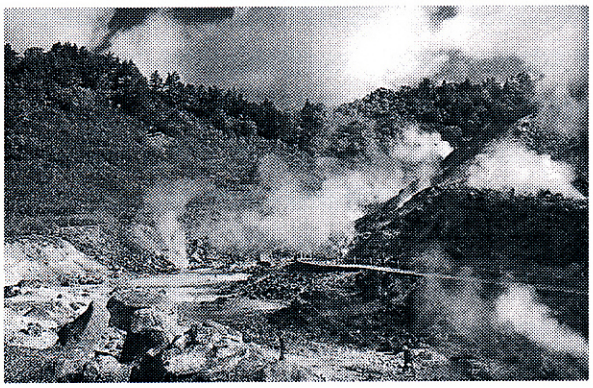
Vol.46 『東北を旅して』 ―玉川温泉のこと―　（平成16年8月25日）



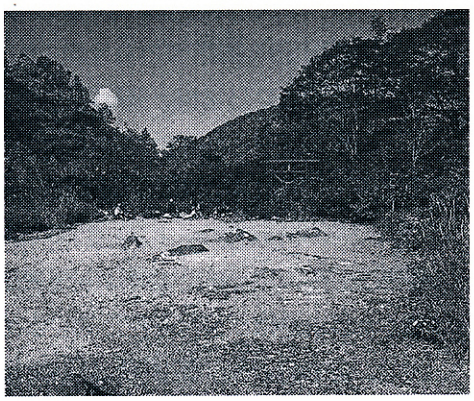
７月下旬に東北出身の友人に誘われて、東北道を北へ向かい、村田ＩＣから山形自動車道へ入り、蔵王をくぐり抜けて「山寺立石寺」には１０時前に着いた。お目当ての味噌田楽の店はお休みだった。ガラス工芸店で「とんぼ玉」を買う。明日からは隣接館で藍染展だと言う。一寸残念な想いで寒河江、鶴岡を経て日本海酒田の港町へ着いた。

酒田の本間家の蔵屋敷は、間口３０間奥行き６５間もあり、今では酒田夢クラブに改装されて、混雑をきわめていた。黒塗りの蔵屋敷は、江戸時代には70万石と言われた豊かな庄内平野から最上川を下って集められた産物の在庫は百万両とも言われた巨大な倉庫であった。

私達は更に日本海に沿って、遊佐、象潟、金浦、西目、本荘、岩城、秋田、天王、男鹿半島へと北へ向かって走り続けた。その町々の街道沿いには「道の駅」がそれぞれ設けられていて、道の駅の中心部には、コミニティセンターと共同温泉浴場が併設され、左方には食堂レストラン街、右方には地元産の土産物、鮮魚菜類売り場、観光案内所が店を連ねていた。

町によっては宿泊施設や海岸バンガローが併設されており、私の感じでは旧商店街が町の中から抜け出し、街道沿いに「道の駅」を核に新しい商店街を形成しているように見えた。町や市が在住者と観光客にかなり配慮した活性化事業だ！と思われた。

岩城に一泊して男鹿半島を半周して角館に向かいました。日本海沿岸に林立する「風車発電」は北の空に巨大なすばらしい景観を見せていた。私が一番期待した「象潟や雨が西施のねぶの花」と芭蕉の読んだ象潟の海岸は、私が見た20年前の面影はなく、多くのホテル、土産物店の中に埋まっていた。全く都会化した象潟には、西行法師や芭蕉への風情はなくなっていた。角館武家屋敷の街はずれにあった、７代目佐藤養助の店で「稲庭うどん」で早めの昼食となった。千葉で見る稲庭うどんより、なぜか肌がきれいに見えたのはあたりの風景のせいだったのかも知れない。絶対見ろ！と言われた「抱返り渓谷」は前日の大雨のせいか、天空から滝が舞い上がり、渓流は谷間に狂乱、轟々とこだましてすばらしいものだった。



今度の旅の最終目的は「癌治療」に抜群の効果があると教えられた「玉川温泉」。新・旧玉川温泉の収容人員1,300人の施設はなかなか予約が取れず、いつも満員ですと聞かされたが、北の友人のおかげで５名１室がとれ、４泊５日の湯治となった。湧き吹き上げる温泉の湯柱、幾筋もヒューヒューと音を立てて空へ吹き上げる水蒸気。地肌は卵黄色となり、下北の恐山以上の凄まじさであった。湯に打たれ、湯に浸り、地熱に体を横たえる４泊５日。治療客が７割、予防客が３割と思われた。

私は４日間湯に打たれた。そして帰ったら肩の皮がむけていた。あれかちょうど１ヶ月。持病の肩こりは消えてしまった。２月に「癌４期」を過ぎたと診断された友人も、重粒子治療の効果も併行したせいか、癌が消失したとのうれしい診断が出た北の旅だった。

「玉川温泉 重粒子研究所についてのお問い合わせがあればご遠慮なく電話してください。」